

豊明希望チャペル教会礼拝

2022/9/25

ローマ人への手紙 5 : 19~21

「永遠の命に導くため」

今日は最初にこの御言葉に注目しましょう。

「5:20 律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。しかし、罪の増し加わる場所に、恵みも満ちあふれました。」

神さまがシナイ山でユダヤの民に、十戒を与えたら、かえって、罪だらけ、違反だらけになったというのです。だったら、十戒を与えなければよかったのに・・・という話なのですが、一方で、違反だらけになったけど、この御言葉に、イエス・キリストという言葉を加えて、後半「イエス・キリストが来られて、増し加わった違反の分だけ、それが全部、恵みにかわる」と言っているのです。



みなさん、オセロゲームって知ってますか？

白と黒の表裏(おもてうら)の石で、互いに勝負して、最終的に多い色のほうの人が勝ちというゲームです。このゲームの醍醐味は、一旦、全部、黒になって、勝ったと思ったら、白に囲まれて、囲まれると、その列は全部、白になっていってしまうという大逆転のある面白さなのです。

ここで、言われているのは、一旦、違反だらけになったゲームボード

の上の石が、ある時、全部、白にひっくり返ってしまった、言わば大逆転が、イエス様がこられたことによって起きると言っているのです。

聖歌 701 『いかにけがれたる』という歌があります。

「いかにけがれたる もののところをも きよめたもう主は げにほむべきかな 罪けがれは いやますとも 主のめぐみもまた いやますなり」(一番)

二番以降を、わたしが、現代訳にします。

「②私は、あなたに逆らうことがどんなにたくさんあったことでしょうか。それに引き替え、あなたに従う日々はどのくらいあったことでしょうか。汚れが増しても、神の恵みは、私の身にいよいよ増すのです。

③思えば汚ればかりの自分で、まったく良い点はないような者ですが、あなたは、そんな者のために血を流し、その血をもって、私の汚れを洗って下さった。

④こんなに充ち満ちた恵みの数々。力の限りにあなたを褒め讃え歌わずにはいられません。罪や汚れが増すほどに、あなたの恵みが私にあふれているのですから。」

20 節を、オセロにたとえて説明しましたが、意味は、この讚美歌にある通りです。

「思えば汚ればかりの自分で、まったく良い点はないような者ですが、あなたは、そんな者のために血を流し、その血をもって、私の汚れを洗って下さった。」

という赦しの恵みを、言っているのです。

もう少し、この 20 節を解説しておきます。

ここで、パウロは一つの重要な律法の役割に、はじめて触れます。それは、「律法が入って来たのは、違反が増し加わるため」だという事です。

「違反が増し加わる」というのはどういうことでしょうか。

二つの考え方があります。

(1)一つは、アウグスチヌスなどが言うのですが、禁じられれば禁じられるほどに、罪をもっと犯したくなる人間の性質の問題の事です。要するに、駄目だと言う律法が、かえって罪への誘惑の原因、誘因となったという事であります。ほしがると言われれば、きっとすごく良いものだから、禁じるのだなと手を出したくなる。

(2)もう一つの考えは、カルヴァンなどが言うのですが、律法は、私たちが気づけなかった心の罪まで気づかせるということです。律法を知ることによって、自分の罪を知り、罪を知り始めると、ほかにもこれがあるぞ、これもあるぞと、パンドラの箱を開けてしまったように、心のふたを律法によって開けたら、自分では気づけなかった罪まで次々、気づき始めてしまったという事です。これは、実際に増し加わったわけではなくて、本来、見えなかった罪が見えるようになったということです。

パウロが、律法の役割として言うのは、この後者の意味をおもに言っているように思います。

しかし、いずれにしても、罪が、増えようとも、それにいっぱい気づくようになったとしても、イエス・キリストを信じるなら、一気に、恵まれると言うことです。

2 番目のことに焦点をあてて、ある哲学者がこんな意味のことを言っています。それ

は、キルケゴールという哲学者の、『不安の概念』という本に書かれていることです。どういう事が書いてあるかということ、人間が不安になるってことは、救われるためのチャンスだということです。クリスチャンは、神様を信じて、イエス様を信じて、もし自分の罪がいっぱい見えるようになったら、「見なかったことにしよう」と思うのでしょうか。見えていいのです。なぜなら、そのぶん、イエス様の赦しをいっぱい経験するだけだからです。全部、オセロの黒の石が、白に変化する、スキッとした経験を日々させていただくからです・・・

キルケゴールは、誤解を恐れずに言えば、不安はいいことだということです。それは人

不安の概念

キルケゴール著
斎藤信治訳



キルケゴール(1813-55)は、信仰を求めながら信仰にいたりえず、たえず不安にさいなまれていた自分自身をみつめる。本書はこうした自己の具体的な体験を通してその心理を分析し、不安の諸相とその本質を論述したものである。彼の仕事は、ハイデッガーその他の実存哲学のみならず、精神分析など各方面に深い影響を与えた。



青 635.2
岩波文庫

間だということであって、自分をごまかないと言う事です。自分が原罪を持つ罪わかっているということです。救われなければならない存在である事をわかっている事です。すなわち、罪とその弱さがある人ほど、救われ、強くなるチャンスなのです。逆にそうでない人は駄目だと言います。

多くの人は、自分の罪を正当化して
わたしは、今年、晴れて、5年ぶりに、
がゴールド免許となりました。この5年間、違反がないということです。

ブルー免許になったのは、ある牧師から、携帯に電話がかかってくる、それは、車を運転中でした。出てしまったのです。警察に見られて、切符をきられました。

恐ろしいですね。そういう、明らかな違反の時にも、人間て、言い訳が出てくるのです。ちょっと出て、「運転中だから切りますね」と言うはずだったのだと、そんなことを警察に言ったように記憶しています。警察は、たんと切符を切ります。違反は違反です。次に心に出てくるのは、罪の他人への転嫁です。今も、その牧師の顔を忘れることがないのは、それだけ、「うらみみ」に思っているからかも知れません。あの牧師がかけてこなければ・・・ずいぶん無茶な責任転嫁ですが、アダムらしいの罪だと、ハッと気がつくのです。

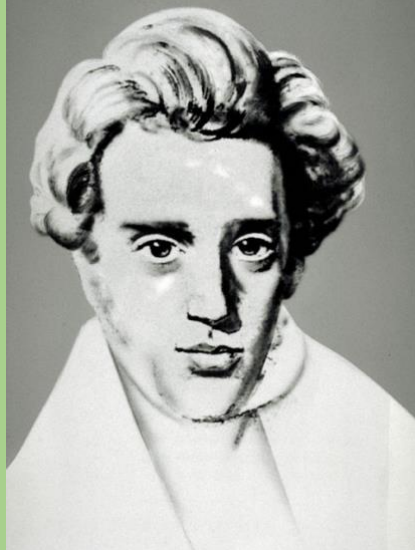
そのように自分を正当化して、不安を解消してしまうのです。20節の御言葉に帰りますが、律法は良いものです。(このテーマは、6章、7章のテーマとなります)。見てきたように、自分の罪深さに気づかせてもらえるからです。だから、それを正当化したり、逃げたりしていたら、恵みを失うだけなのです。ただ、それでも、救いが見えなかったら、つらいだけです。でもキリストの救いが見えているクリスチャンにとっては、自分を正視する目が与えられ、勇気が与えられ、むしろ、「それでも愛して下さる」神の愛を理解することが出来るのです。

讚美歌にあったとおりです。

「③思えば汚ればかりの自分で、まったく良い点はないような者ですが、あなたは、そんな者のために血を流し、その血をもって、私の汚れを洗って下さった。④こんなに充ち満ちた恵みの数々。力の限りにあなたを褒め讃え歌わずにはられません。罪や汚れが増すほどに、あなたの恵みが私にあふれているのですから。」

20節を中心にみてきましたが、今日の箇所、20節をはさんで、19節から21節を、今一度確認します。

「5:19 すなわち、ちょうど一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、一人の従順によって多くの人が義人とされるのです。5:20 律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。しかし、罪の増し加わる場所に、恵みも満ちあふれました。5:21 それは、罪が死によって支配したように、恵みもまた義によって支配して、私たちの主イエス・キリストにより永遠のいのちに導くためなのです。」



してい
人だと
ければ
こと言
かって
がある
うこと

ます。
免許証

19 節は、前回から続きで、アダムの罪、すなわち、原罪が、第二のアダムによって、多くの人が、先週の御言葉にもあったように、麦畑のように、一粒の麦が死んで、多くの人が、かえって救われることになったということです。



そして、20 節。そこには、オセロの逆転ならぬ、人類に、救いのダイナミックな逆転がおきたのです。

エリザベス女王の葬儀が行われ、TVで葬儀がすべて流され、日本

語で御言葉まで正確に訳されて流されていました。画期的だと思います。

最初に牧師が読んだのは、この御言葉でした。

I コリント 15:20 以下です。「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりを通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。」

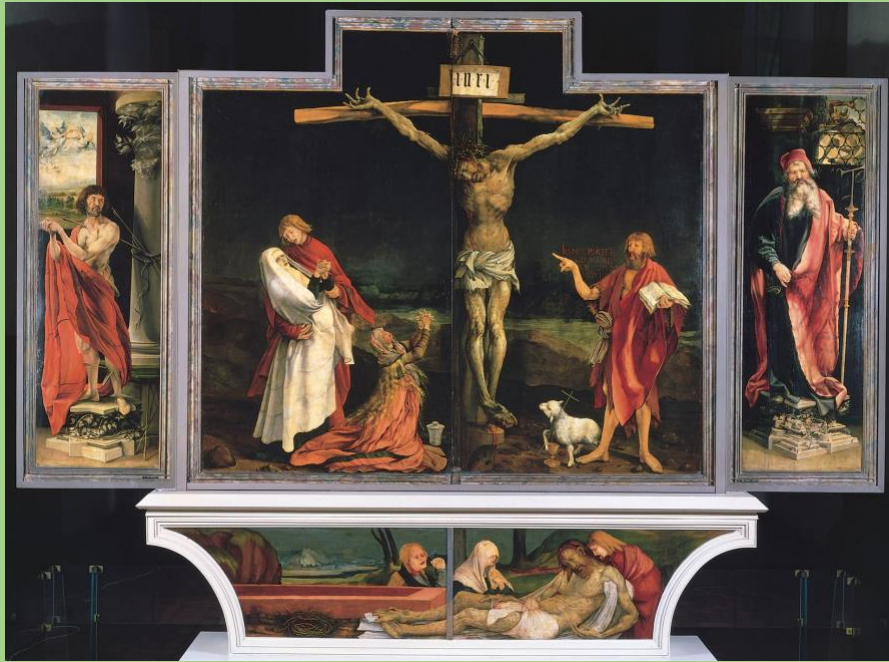
イエス様は初穂となり、死がアダムを通してきたが、イエス様を通して、復活がきた、人は、永遠の命をいただく、大逆転がおきるとの御言葉です。

王も、私たちイギリス国民もそういう考え方をするのだと牧師は宣言しているようでした。

21 節の御言葉を読みます。「5:21 それは、罪が死によって支配したように、恵みもまた義によって支配して、私たちの主イエス・キリストにより永遠のいのちに導くためなのです。」

私たちは、この世に生きている限り、必ず死ぬ存在です。死が支配しています。しかし、イエス様を信じ救われた今は違います。永遠の命が、この世の死の先にあるのです。まさにこれこそ、福音の大逆転です。

先週、二人の姉妹が、四国にある大塚美術館を訪れたそうです。わたしも何度か行かせていただきましたが、クリスチャンで、西洋美術の研究者である、香川大学教授



の中谷中谷博幸先生の案内で、行かせていただいたとき、一枚の絵を示されました。この絵です。

ドイツとの国境、フランスのコルマールという所にあるウンターリンデン美術館にイー

ゼンハイムという修道院付属の病院の礼拝堂にあった、イーゼンハイムの聖壇画というがあります。見上げる高さがあって、ドアのように開くようになっていて、三面鏡のように、三面に描かれたのは、イエス様の十字架の姿です。その下には、イエス様の死体の絵も描かれています。それは、凄惨で生々しい描写が特色です。十字架上のキリストの肉体はやせ衰え、首をがっくりとうなだれ、苦痛に指先がひきつっています。その病院に運ばれた病人は、その絵の前に一度、寝かされてから、治療に当たるといふことだそうです。なんといいましょうか。縁起が悪いといひましょうか。しかし、その意味は、たとい、死を前にした病人であっても、イエス様は、彼と同じ苦しみをしてくださったのであり、事実、死んだのだ。あなたも苦しいだろう、死ぬかも知れない。治療はうまくいかないかもしれない。しかし、イエス様はあなたと共にいつも寄り添う。寄り添って、たとえあなたが死んだとしても、イエス様と共によみがえることになるのだと、その絵は患者に教えている、そのためだったのかもしれないというのです。

たしかに、罪は、死という最強の武器を持って私たちに支配します。誰も、この罪の支配から自由になる人はいません。それほど罪は強い。でも、恵みがある。私たちの主、イエス・キリストの、義の賜物、義のプレゼント、すなわち十字架の贖いというプレゼント、その贖いによって義とされ、神の子とされ、また、天国に行けるといふプレゼント、これを手にすると、今度は、どんな罪も、どんな不安も、この命の支配に勝てなくなります。必ず、「永遠のいのちを得させる」という事です。

さて 5:12 節から原罪の、そしてアダムとキリストの話でしたが、ここで言われてい

たのは、原罪も根こそぎ解決されるキリストの贖いの素晴らしさです。

信じたいのです。この週、罪との戦いが続くかも知れません。そして、自分に絶望することもあるでしょう。罪の結果である死に私たちは必ず向かい合わねばなりません。しかし、キリストを信じるなら、その死の向こうに必ず、永遠の命があることを知って下さい。そして、その自分の罪や弱さとの戦いのさなかにあっても、キリストはあなたに寄り添い、たとい凄惨な戦いのさなかにあっても、安かれと声をかけて恵みを与えて下さる方がおられることを知って、ここからこの週をはじめさせていただきます。